



Title	中井髡庵・髡庵夫人・中井蕉園葬儀記録
Author(s)	山中, 浩之; 小堀, 一正
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 103-130
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90701
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

資料報告

中井髣庵・髣庵夫人・中井蕉園葬儀記録

山中浩之
小堀一正

本誌第五四号に中井家葬儀記録の内、中井竹山葬儀記録を紹介したが、今回それに引き続いて、中井髣庵・髣庵夫人・中井蕉園の記録を翻刻する。この三人の記録は前回にも記したが、つぎのような文書からなっている。

(一) 中井髣庵葬儀記録

(1) 焼香次第(仮題)

二枚

(2) 葬列供役人名書付(仮題)

二枚

(3) 葬儀行列

一紙

(4) 墓碑見取図

二枚

(5) 三虞朝夕奠品案

横帳一冊

(二) 中井髣庵夫人葬儀記録

(1) 貞範媼裏事記(下書)

同一冊

(2) 貞範媼裏事記(浄書)

同一冊

(三) 中井蕉園葬儀記録

(1) 文明先生裏事録

同一冊

ただし右の内、髣庵葬儀の「三虞朝夕奠品案」および髣庵夫人葬儀の記録下書は割愛させていただく。

中井髣庵は宝暦八年(一七五八)六月一七日、六六歳で歿した。懷徳堂官許化の中心的功労者であり、三宅石庵歿後、享保一五年(一七三〇)末から歿するまでの二八年間、第二代学主兼預り人として懷徳堂の危機衰退期を独力で支え、竹山・履軒の父として次代の隆盛をもたらす基盤をつくった人として知られている(拙稿「中井髣庵」本誌第五五号)。ただし、みられるように髣庵の葬儀記録は簡略なものであり、後のように整備された詳細なものではない。会葬者や香儀の記録は失われた

ものと思われるが、それにしてもこの簡略さは当時の懷徳堂の状況を一定程度反映しているように思う。晩年、五井蘭洲の協力があつたとはいえ、同志の脱退・死歿の中で、一人で運営しなければならなかった態勢が示されている。のちの記録にみられるような町人同志による組織的な葬儀の取仕切りという様相はうかがわれない。

贅庵夫人はや（玻瓈あるいは早と表記される）について知られることは少ない。柩に書かれた文によれば、植村六左衛門の娘として正徳二年（一七一二）一〇月九日に江戸で生れた。植村氏はもと三河の人であつたが、松平主計侯に仕え、その領地播磨佐用郡長谷の地を管理する任にあたつていた。しかし両親とも先に歿し、孤となつたはやが、中井贅庵に嫁したのである。元禄六年（一六九三）生れの贅庵より一九歳年下であつた。その婚姻はいつであつたかわからないが、贅庵の年齢からみて、中井家がすでに大坂へ出てきてからであつたと思われる。はやの歿年は天明五年（一七八五）八月二十六日で、享年七四歳であつた。贅庵と並んで誓願寺に葬られ、貞範と諡名された。諡名されるのはこのときからであり、おそらく竹山の考えによつたものと思われる。

この葬儀記録はさきの贅庵のものにくらべて非常に整

備されたあり方を示している。「護喪」「司貨」など同志・門下による役割配備が整えられるとともに、葬埋の方法、行列次第、礼場内の配備や葬礼の受付など、みごとに組織された様子をうかがわせる。学主や預り人の死ではないが、これは中井家というより懷徳堂として葬儀を行なっているのである。物々しいとさえいえるほどである。それは何よりも、贅庵と共に堂を築いてきた功労者としてであり、そして天明二年、第四代学主に就任した竹山の母であり、その就任後、はじめての大きな出来事でもあつたからである。その葬儀の壮大な遂行そのものが懷徳堂および竹山の力を示すという性格を帯びていたとみられる。その意味で葬儀記録はそれぞれの時期における懷徳堂の組織や態勢を語る資料でもある。

竹山の長子中井蕉園の死は享和三年（一八〇三）八月四日で、享年三七歳であつた。蕉園の葬儀は贅庵夫人のそれよりもさらに盛大ではあつた。しかし悲痛の趣は深いものがあつた。老竹山は誓願寺へ行くこともなく、懷徳堂内で淡輪元潜（蕉園の前妻の父・医家）につき添われながらその出棺を見守つていた。また履軒の姿も葬儀記録にあらわれない。履軒に親炙した蕉園の死は、履軒にとつてもあまりにもつらい事態であつたのだろう。

蕉園は学力・詩藻豊かな人として周囲から囑望されていた。彼自身、非常な努力家であったことは、その年齢段階を追っての予定課業科目の計画をみても知られる（中井天生『先哲遺事』上）。田能村竹田は蕉園の詩について「その詩、家法を襲^つがず、別に機杼を出だす。新秀細潤、喜ぶべきなり」（『竹田莊詩話』）と評した。ただ、塾生の一人で蕉園とも親しく、この葬儀にも参列した角田才二郎（号九華、岡藩士、『近世叢語』の著者）は、同藩の竹田に、蕉園のことを「然^{しか}ども生平、思を構ずるはなはだ苦し、時ありてあるいは心血を嘔す。殆ど死せんとすること数次なり」（同前）と語ったという。蕉園は自分の病弱な身体を忘れて詩文の構想を練る繊細な人であつたらしい。

竹山は寛政九年、隠居して家督を蕉園に譲り、学校預り人の役を勤めさせていた。また翌一〇年に蕉園は江戸へ行き、尾藤二洲・柴野栗山らとも会って、竹山の後継者としてすでに活動しつつあった。晩年の竹山にとって、蕉園の病身は最も不安なものであった。病状からみて、蕉園の病氣は結核であつたらしい。竹山は苦しい家計を遣繰りして蕉園を京都へ長期保養に行かせているが、その間、竹山が蕉園に宛てた書簡の数々には、息子を氣遣う父としての竹山の思いがにじみ出ている。しかしその効もなく蕉園は逝った。竹山は「男曾弘（蕉園の諱）を哭す」と題する詩を詠んだ。「天、文運を開かんと欲し、我に授くるに而^{なほ}の才を以てす。年を奪う、何ぞはなはだ早きや。文運竟^{なほ}に開け難し。失声するも私勵するに匪^{なほ}ず。併せて日東のために哀しむ」と。

〔贅庵先生喪事關係〕

史料(一)

焼香之次

善太

徳二

東庵

正民

仁右衛門

正九郎

杏節

温故

吉兵衛

佐右衛門

徳兵衛

喜八

六兵衛

御留主居

五井先生

二万五郎

佐助

六平

史料(二)(題欠)

下役

同

世話人

周

助

挑灯

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

小川屋左助

尼七作助

泉利兵衛

道吉太兵衛

安田市兵衛

北国屋加兵衛

同藤兵衛

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

仁右衛門 藤 助
正九郎
杏節
温故

吉兵衛
佐右衛門
喜八
平吉兵衛

〔仮題〕
「整庵先生葬儀行列」

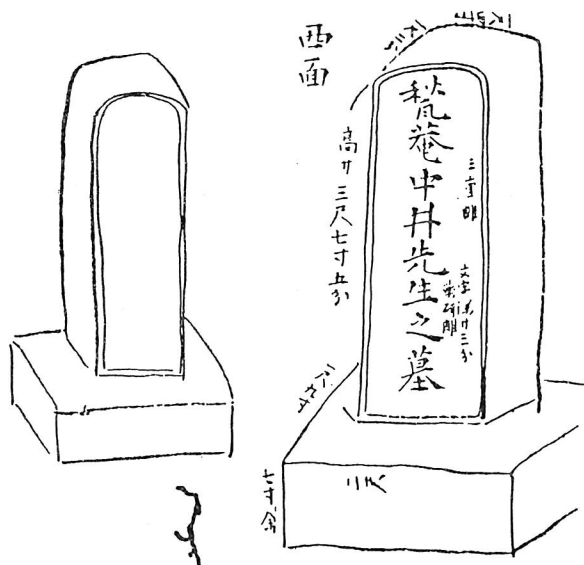
下役 挑灯 同 同 若党
下役 世話人周助 乗物八人 草履取
下役 挑灯 同 同 若党

徳二 正民 温故
東庵 正九郎 杏節 仁右衛門 若党

草履取
同 平吉兵衛
同 佐右衛門
同 喜八
同 吉兵衛

同志中 同志中
書生衆 書生中供

(別紙一)



(別紙二)

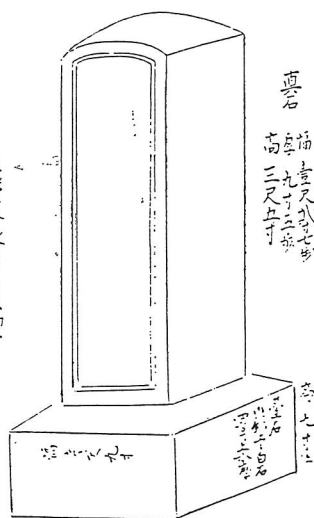
「翫庵先生様御形ヲ以寸法割合之図」

幅 壹尺貳寸七步
厚 九寸五步
高 三尺五寸

「高 九寸位」

台石

御影上々白石
五方共上水磨



「大極上本泉青石ヲ以細工
御先規之通随分入念仕立
四方共極上々本水磨」

「幅壹尺九寸」

(表紙)

天明五年乙巳之秋 八月廿六日

貞 範 嬬 裏 事 記

贅庵先生夫人

天明乙巳八月廿六日 戊半剋終焉私諡曰貞範君

護喪

古 林 正 民

加 役 早 野 永 助

尼崎屋七右衛門

播磨屋九郎兵衛

播磨屋手代 專 助

桑 名 恭 藏

司書

行司中

塾生

中井氏御母堂御病氣之處養生不相協夜前五ツ時過死去被致候

右御知セ申度如斯御座候以上

八月廿七日

学校行司

右相知セ候名当校事藉ル出ス

廿六日夜四ツ時 京都 白木屋 草島 三木江別飛脚遣ス

翌廿七日朝龍野江相場飛脚ニ書状出ス

同日北条西宮伊丹浜村飛脚江書状出ス

同日早朝ル禁酒札はり置

治 棺

小之方

寸 法

高サ貳尺九寸 横壹尺七寸 長サ壹尺九寸

灰隔壹組 帳場札二枚 墓標一枚

大工源右衛門ニ命ス

丹六事 三木屋 久兵衛

坑 地

胎範様御碑之左右小兒之墓數々有之北之方ニ定め其小
児棺ハ一旦掘出し此度棺之上ノ隅へ埋候積りに申遣し
見繕ハセ其通りに相究申候

穿 墳 手 伝 六兵衛

廿八日 雇四人

廿九日 三人

深サ 壹丈余

石灰 八斗

シヤリ山荷にて十荷

衷 服 鼠上下

白帷子 白帯

右善太 徳二 遠藏 七郎

四人分 出入呉服屋布屋清兵衛へ命ス

胎範様之時は白帷子上下とも衽たちすて斬衰之心持ニ

致させ候此度ハ齊衰之心にて其儀無之

送葬具

田邊屋 源 蔵受取

素輻 素灯 六張

白服 下女 兩人分

かし物屋 大和屋彦兵衛へ命ス

神主

早野 永 助受取

廿七日 指物屋平兵衛命ス

沐浴襲斂之具

古林 正 哲受取

穀皮 五斗

金崎市右衛門る四貫島へ命ス

充 襄 百

廿七日亥刻

大斂

左兵衛

さや

そよ

ちよ

廿七日之朝る門鎖

九月二日迄五日之内

廿九日迄垣外番申付

廿八日五ツ時

誓願寺住持寺吊悔ニ来ル

下音ニテ少シ斗り誦經十念有之にて相済

神主

筆者 加藤 友輔

棺 蓋

筆者 古林 正哲

貞範媼柩

媼諱玻瑛姓植村氏考是經翁称六左衛門世參河人事松平主計君宰干播之佐用郡長谷妣水野氏媼已孤配整菴中井先生生二子曰積善曰積德孫男三曰曾弘曰曾縮曰菊麻呂孫女一曰刀自以正徳二年壬辰十月十九日生于江都天明五年乙巳八月廿六日没干浪華享年七十有四葬于城南誓願寺塋次媼性勤儉婦道周備訓子有方撫衆有恩而貞正可以為閭範者尤有称其名云 百五十九字

墓 標

筆者 桑 名 恭 蔵

貞範媼植村氏之墓 と認む

一廿八日懇意内るかり候下男之分皆かんばん耆刀にて明廿九日昼後早る参り申候様にと申付候

廿九日昼前

帳場

虎屋 平右衛門手代

福島屋 吉兵衛手代

広屋 徳左衛門手代

伊勢屋 藤四郎手代

右之内右人ハ手替り

挟箱 舛平男

重硯 帖三冊

かまむしろ

小遣銭 五百文

酒弁当

札

帳場 中井善大

連名不用

休息所

是ハ茶店之前ニ
建置候

行列道筋

今橋ヲ堺筋ヘ南久宝寺町ヲ八丁目寺町ヘ

誓くわん寺

床凡十五脚 門前ニ並候 茶店申付

蔵屋敷方 寺方丈ニ而休息

寺ニテ 茶方 尼市手代

廿九日斗り古林門サス

廿九日未上刻

出棺 但し乗物之内ヘ神主新筆硯墨ふく紗ニ包ミ入置 墓

標も同断

諸方より候下部出棺前食事出し不申相済次第遅速とも

此方ヘ帰り次第度被致候様ニ申含候 尤支度之節も禁

酒

勝手向にて格別心易働候者ハ少く酒にても振舞候哉 是

ハ到来之酒にて相済候はとなるへし

下役 美濃屋 文助

挑灯 伊勢屋藤四郎男

挑灯 古林 益 安男

挑灯 尼崎屋七右衛門男

町代 周助 左官 市左衛門

岡田屋 次兵衛

手伝 六兵衛

下役 砂屋 忠兵衛

挑灯 河内屋三郎右衛門男

挑灯 生貝屋清右衛門男

挑灯 淡路屋源右衛門男

六尺 丸屋 弥助

浅五郎 次兵衛

○下女 若党 美濃屋佐太郎

さや 但し下女ハ駕籠兩脇ニ付此所紫

挟箱 久八

長刀 高安 刑部男 羽織袴股たち

素輻

○下女 若党 播磨屋左兵衛

く に

草履取 尼崎屋市右衛門男

六尺 藤屋 藤兵衛

喜兵衛 八百屋藤兵衛

善太 若党 八百屋 弥介 草履取 新八

遠藏 正民 若党 庄兵衛 章甫

德二 草履取 近江屋休兵衛男

七郎 源兵衛 温秀 草履取 弥介 正哲

瀬左衛門 若党 藤次 草履取

寿伯 草履取 宗助

兩人草履取 藤八

恭藏 若党 彦助 草履取 花屋左兵衛 弥太郎 草履取 順平 格式供立

幾次 同 多助 下人 卯之松 岸松 下人 小太郎

空輿 播磨 藤兵衛 山野屋 藤八 吉兵衛

舛宗男

同 頭藏 甘節 同 久米三郎 草履取 仁兵衛

諸同志

釣台 雨天ニ見ヘ候故 傘用立

全庵 吉林塾生 豊次 同 久米三郎 草履取 久兵衛

挟箱 近江屋久兵衛男

明庄男

。明石留守居 大嶋 官兵衛格式 保科様内 花崎 林平同 津路屋敷 小見山五右衛門 右ハ葬場ヘ先ニ御越有之様に再三辭退致候 得共是非とも随從可有之由如此

大工 源右衛門
手あき 檜牧屋 藤兵衛

吉介

傘支配 美濃屋 左兵衛

喪主兄弟 竹杖

喪主 親戚 塾生

右之分半肢立 草鞋

胡灯持 看板 脇差

舁夫 看板

導師寺門前迄出迎候

焼香之列

善 德 遠 七 順 正 宗 温 章 正
太 次 蔵 郎 平 民 助 秀 甫 哲

礼場寺内

右焼香白檀壳包にて相済

瀬左衛門 恭 丈 寿 弥 塾 同
蔵 助 伯 郎 生 志
善 德 遠 七 順 正 温
太 二 蔵 郎 平 民 秀

留主人

尼崎屋市右衛門

同手代 老入

尼崎屋七右衛門

手代 老入

橋屋 忠右衛門

大坂屋 忠兵衛

下男 老入

帰り

駕籠 善太 神主守護

其外 親戚茶舟一艘

上大和橋江付置

廿九日帰り後雇人江夜食出ス

尤親類同志別懇之内当夜一所ニ帰り之人同断

上下六七十人

汁 とうふ

たゝきな

猪口 こんにやく

蓮根

すみそ

平皿

いも

せんまい

飛龍子

香物

一廿八日廿九日両日之食事両尼崎や播磨屋舁屋米屋長しま古林
数軒を来り候重之内にて大方相済

一廿七日朝より廿九日夜迄薄粥煮させて喪主兩人両男食用とす

翌日寺江施物遣ス目録

覚

一方金貳百疋

導師へ

一同貳百疋

墓地代

一銀三匁ツ、六包

役僧六人

一同老兩

西堂

一同三匁

弟子二人

一同貳匁

小僧

一同貳匁

御堂宿

一同八匁

御尼へ

一同貳匁

墓御経料

一錢貳百文 貳包

御家来

一五百文

盛物料

一銀貳兩

長刀挾箱料

一錢老貫五百文

乗物挑灯代

一銀貳匁

御茶料

一貳朱一片

七々日忌

一白米七升

同

右之通御受納可被下候

九月朔日

誓願寺 御納処

中井善太

名札

中井善太
中井遠藏

砂村童及

使者

丹六事

久兵衛

家来

新

八

床几代

錢壹貫三百三十五文

外ニ垣外へ

錢百文

右久兵衛持参

名札

九月朔日

会葬礼

袴羽織

田辺屋 源藏

中井善太
古林正民

名札

中井善太

町内并ニ近所表向之所

町内

鴻池 善作

倉賀 治左衛門

助松屋 新二郎

加賀屋治右衛門

吉嶺 昌三

片山 右門

泉屋 義笠

道具屋 勝兵衛

野田や 吉兵衛

鴻池 藤七

米屋 伊太郎

天王寺屋伊右衛門

天王寺屋忠兵衛

天王寺屋 清八

岩井屋仁右衛門

玉子屋 太兵衛

才田屋 半兵衛

帶刀袴羽織にて 播磨屋 佐兵衛

名札

中井善太

足守 沼 惣左衛門

松山 遠山 新吾

中 矢 寛助

延岡 四屋 悦之介

立野 三沢 八左衛門

丸山 直左衛門

津輕 小見山 直右衛門

安治 布施 庄左衛門

尾張 中西 武佐二郎

姫路 有馬 武市郎

三股 勝之丞

肥後 菅野 尚太郎

古山 愛助

杵築 岡田 鉄藏

小田原 酒井 良藏

渡辺 又兵衛

篠田 徳庵

塩屋 五郎兵衛

倉橋屋 藤四郎

阿波屋 太郎介

古屋 甚左衛門

篠崎 長兵衛

近江屋 休兵衛

加嶋屋 休右衛門

泉屋 利兵衛

由比 甚右衛門

近藤 三右衛門

小山 作兵衛

福嶋屋 武兵衛

同 喜兵衛

壹井屋 吉右衛門

多羅尾 元三郎

淡輪 元潜

金屋七郎 右衛門

播磨屋 源兵衛

但し町内へ当夜源藏直に相務他所へ翌日方角を分ち左兵衛

兩度巡勤以手札申置

先年之形にて別懇中門下之分札使省略之

一初虞再虞之料理ハ甚混雜故大忠ニ申付拵さす

一三虞ハ古林ハ料理備へ

費用覚

一百拾六文 豆腐九丁

一七百八十七文 白絹七尺

但し瞑目中并ニ御湯巻入用

一三百六拾文

たらひ
手おけ

杓

一四百六拾文

白晒 手拭

但し絞袷入用

一七十八文

小遣 下女へ渡ス

一貳百文

草履

但しかどおり買

一五十文

挾箱 けづりちん

一四拾八文

はし

一三百五十七文

米 つきちん

右小メ 貳貫四百七十六文

一金子沓兩貳朱

寺へ遣ス分

一拾貳匁九分

同断 沓兩ツ、三ツ

一貳拾四匁

同断 三匁ツ、八ツ

一拾匁

同断 貳匁ツ、五ツ

一五百文

盛物代

一沓貫三百卅五文

帳場茶店 床几代

一四百文

寺男へ遣ス

一沓貫五百文

のりもの 提灯代

寺へもたせ遣ス

一百文

寺垣外番へ

一三百文

会所 周助

一貳百文

町下役兩人へ

一六百文

丁ノ番人へ

一六拾六匁

白張乗物 沓丁

白綸子へり糸ふサ

一廿四匁

白張提灯 六ツ

一九匁

下女兩人 装束

一百卅八匁四分

大工 源右衛門

内 百廿匁

棺小之方ニ

拾三匁

灰隔

貳匁

棺之鉄環

沓匁

墓標

一拾貳匁五分

立机貳枚

但し内 三升へ棺之底へ志く

石灰 八斗八升

一五百文

しやり土 十荷

一貳拾七文

竹屋 垣竹

但し□けき夫砂屋忠兵衛上町住居士丹利ゆへ是へ申付直
に寺へ運はす町にて土屋ヲ納申候十五荷□ほと十荷にて
有之候

一八百拾五文

草履 わらず

一六百五十文

やかた 茶船

親類婦リ之舟

一沓貫六百六拾文

穴ほり手伝 六兵衛

但し廿八日四人 廿九日三人 メ七人分

右小メ 金一兩貳朱

銀貳百十六匁八分

錢八貫七百廿五文

一拾貫百八拾八文

又助 人足賃

内

壹貫五百文

京飛脚

五百文

廿七日 やとひ人二人

六百文

廿八日 三人

四貫八百文

廿九日 十六人

壹貫七百廿四文

若党 四人

六百六拾四文

かみゆひ代

四百文

九月朔日 二人

一四匁三分

みのや佐兵衛へ人足世話料遣ス

但し又助子也

一百七拾七匁四分

布屋 清兵衛

廿九文

廣五郎礼 壹疋

六拾三匁

五郎礼 三疋壹反

七匁貳分

帷子四ツ并帶四ツ仕立代

六匁五分

綿しん 帯に入

拾七匁貳分

上下四ツ 風染仕立代とも

拾三匁

白木綿 壹疋

廿貳匁五分

風木綿 羽織二ツ

拾九匁

同袴二ツ

(貼經)

但し白帷子白布帶鼠上下四人前にて百貳拾八匁九分也 右之

大小平均にて 右人前三拾匁七分八リ五も 鼠袴羽織貳人前四

拾匁匁五分 右右人前にて貳拾匁七分五リ

右二口右人前にて五拾匁匁四分七リ五も也」

一拾四文

一五匁

蓋

但し座界ハ有合にて別ニ不申付

一壹匁

古梅園墨一ツ

但し神主題名 硯ハ新物 有合 別ニ調不申尤寺へ此分

持参

一拾匁

家内米坊 五人寺参り包銀

一貳百五拾文

蒲筵四方まるの

但し靈座の下敷也

一五百文

熊谷笠 二かい

但し喪中寺参り入用

大小

百九十七匁五分

拾貫九百五十六文

金^〆壹兩貳朱

代凡六拾七匁五分

銀^〆四百九拾四匁五分

錢^〆貳拾貳貫百六拾壹文

代凡貳百廿匁七分

右總合

七百八拾三匁七分

右之内

金壹兩貳朱

入用高

代凡六十七匁五分

銀四百八拾四匁貳分壹リ

錢貳貳貫文

代凡貳百貳拾匁

差
七百七拾匁又七分壹リ

播磨屋九郎兵衛る当座取替有之

差引
拾匁又九分九リハ九月前節季之内一所ニ払出しニなり
相済

(表紙)

蕉園先生

文明先生襄事録

享和癸亥八月四日 寅上刻終焉私諡曰文明先生

易黃卦象辭文明以止人文也

護喪

古 林 温 秀

并 河 誠 輔

加役 藤田 九郎兵衛

山片 平右衛門

中井髷庵・髷庵夫人・中井蕉園葬儀記録

司書

長谷川七郎右衛門

中井 雄右衛門

中川 元 吾

岡 橋 文 助

中井 要 藏

計告

行司

(ヤシロ)
朝公儀御窺書之覚

月番東御奉行所

口上之覚

悴淵藏義病氣之処今曉死去仕候ニ付右死骸取片付如何可仕候哉
此段奉窺候已上

中井淵藏同居親

中井 澤 翁

八月四日

御奉行所

右書付 八田内意ヲ以而北組月番惣代森本重藏方迄七郎持参相願候事

但し惣代ヲ願候事郁次一件京都掛ニ付如斯

六日朝東番所る書状到来

連名 工藤 次郎四郎

小泉 忠兵衛

案文

御用之儀有之間只今若狹守御役所江可被罷出候以上

八月六日

大津

并河 丹波介

三木 佐渡守

小山 伊三太

大村 彦太郎

革島 信吉

右之受案文

御用之儀御座候付只今可罷出旨奉畏入候以上

八月六日

中井 潔翁

伊丹之分

山口 平左衛門へ

相頼社中通達之事

上之式人連名当
当番所名代使者

田中 純治

当番所ニ而口達公辺差支之義無之候ニ付勝手ニ葬式可仕旨被仰
出候

相濟候即刻町内年寄川井立牧へ中井潔翁名^(ヤブレ)官辺届向相濟葬

式八日未刻之由使者申遣ス

其外遠方江戸龍野坏追而相知らせ候事

治棺 四日朝申付ル其夜来ル 小之方

門鎖六日四ツ時々十日迄

寸法

訃告案文

以手紙致啓上候然へ中井淵蔵義兼而之病氣養生不相叶去ル四日
暁被致死去候此段為御知申度如斯御座候以上

八月

学 校 行 司

灰隔帯組

高サ 式尺九寸
長サ 壹尺九寸

横 壹尺七寸
厚サ 壹寸五部

帳場札 幅四寸 長壹尺三寸

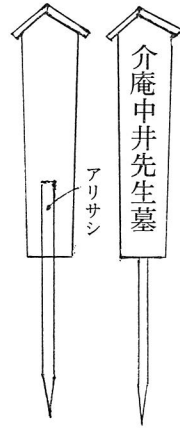
休息札 幅六寸 長壹尺五寸

墓標 筆者 早野 義三(次頁参照)

右相為相知候名^(行カ)当

乗輿(次頁参照)

京都之分 太田 碩庵



扱地

田中 純治

三木屋 久兵衛

貞静様御碑之左傍隙地小兒棺差障候ニ付一旦掘出し此度棺ノ
上之隅へ埋候積リニ申遣し見繕ハセ其通りニ相究メ申候事

穿墳

寺之手伝へ申付ル

七日之朝々掘リカケル

深サ棺上卷丈旧例出入手伝六兵衛へ申付ル此度相改メ寺へ相

頼ム甚妙ナリ

石灰八斗

砂利山荷ニ而十荷

築埋之砌不足ニ付追而申付ケ

都合砂利 十三荷

石灰 老石老斗五升

右砂利石灰之類寺ニ而申付ル

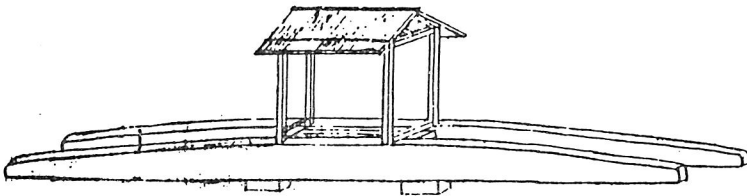
喪服

古林出入大和屋孫兵衛へ申付ル

鼠上下

一

中井鑿庵・鑿庵夫人・中井蕉園葬儀記録



白帷子 一

白帶 一

□□喪主七郎分

神主

大和屋長兵衛ニ申付ル
執筆 早野義三

沐浴襲歛之具

手盤 一

手巾 一

櫛 二

剃刀 一

剪刀 一

元結 一

沐浴

左兵衛

千八

さ屋

さへ

たに

大歛

古林温秀

井河誠輔

中川元吾

文四郎

棺中裏面塩

施漚青々々

凡八斤

充囊 大小百五十

以桐木屑代穀皮六斗

紙褥 此紙以木棉木屑充之

布絞 木綿一反四裁用之

時服 浅黄絞所帷子木綿繻伴

新製木綿幘鼻褌

公衣裳 市橋矣拝領絞付

帶 是ハ定紋付之上下無之故也

儀刀 ウツボ織有合巻はり用之

摺扇 大工太右衛門ニ命ス

握手 用加賀絹

幘目 同

飯糰 同

鼻紙 加賀絹右三品ニ付凡五尺

沐櫛 小菊一帖

臍帶

生時髪

剪爪

印章

筆 一対

硯 一面
墨 一握
華燄 式三葉

但シ印章以下五品平素机上之具故斂之

棺蓋 執筆 早野義三

介庵先生柩

先生諱曾弘字伯毅姓中井氏稱淵藏介庵其号又号蕉園其先播人父竹山夫子母革島氏以明和丁亥十二月十八日先生於大阪府岸先生性明敏而溫易手不積卷詞藻宏麗而敏捷古今鮮比夫子之老也授岸務于先生未數歲罹疾中愈而復劇以享和癸亥八月四日卒年三拾有七娶淡輪氏生一男而俱亡娶川北氏生男不育有一女在襁先生之倫十余皆早世一弟独存曰曾縮先生疾病撰治岸事葬于誓願寺私諡曰文明

五日四ツ時誓願寺病氣ニ付名代組合慶恩院来ル為吊悔棺前ニ而梵音至極穩也

銘旌 古製異様ニ付不用之新用縫吊墓標ヲつゝむ歸ルニ杵原紙ヲ以ス

正面粉書 筆者 早野義三

文明先生中井君伯毅柩

八日四ツ時帳場之人数遣ス

中井覺庵・覺庵夫人・中井蕉園葬儀記錄

帳場者誓願寺門前北之方溝之上ニ足なしの床几式脚わたし
綵筵ヲ布

此中式人
手明キ

尼崎屋 七右衛門

福嶋屋 吉兵衛

伊勢屋 藤次郎

播磨屋 九郎兵衛

宇和嶋屋庄左衛門

袴屋手代 式人

但シ帳場一切袴屋仁右衛門引請

内帳面五冊名札刺四ツ此方る袴屋迄遣ス

帳場之食事袴屋る遣ス

帳場 中井七郎

休息所

休息所実相寺

筆者 播磨屋九郎兵衛

応接者 升平手代式人

長谷川七郎兵衛

長谷川喜右衛門

并ニ小童

行列道筋

今橋ヲ　なにわはしヲ　南久宝寺町ヲ　上本町八丁め寺町
誓願寺

行列奉行

中井要藏
田辺屋仁右衛門
文四郎

先弘

雇治兵衛

雇沓　八

侍
麻上下股立
わらち

長野友太郎
麻上下草履
半股立

佐藤要藏

同

石野重藏

同

大和屋七兵衛

與夫

看板わらち

同

羽織一刀

同　伊右衛門

梁田八百吉

同

角田才二郎

同

中原卓治郎

同

與夫

同

同

同

挟箱持

雇長七

若党

よし村屋
善兵衛
麻上下
股立
わらち
若党
はりまや
助

草履取

千八

七郎
裏服わらち
竹杖

若党

雇安兵衛
麻上下
股立わらち

草履取

石平

以下礼服

井河小一郎

草履取

若党

麻上下

若党

雇内

中井雄右衛門

草履取

平兵衛

永嶋　肇

若党
草履取

井河誠輔

若党
同
草履取

古林温秀

若党

右病氣ニ付不参

草履取

川北陽三郎 格式供

荒木伝治代慶治

格式共

傘籠 尼市僕

塾生供 雇老人

同志

田中純治 格式供

以上

空輿

喪主

神主護シ婦ル

道師門前迄出迎
焼香之列

幼少ニ付代

病氣ニ付不臨

上京ニ付不臨

病氣ニ付
慶治相勤

中井 七郎

并河 小一郎

中井 雄右衛門

草島 新五郎

長島 肇

淡輪 元策

川北 陽三郎

淡輪 鹿輔

荒木 伝治

並河 誠輔

古林 温誠秀

古林 秀蔵

早野 義三

同志

金崎 市右衛門

懇意ニ付同志
之列ニ加フ

懇意ニ付同志
之列ニ加フ

藤田忠右衛門死去ニ付
今助相勤

病氣ニ付不臨

前日死去ニ付
不及代

右兩人留主役相頼出門之前焼香

塾生

藤田 九郎兵衛

山片 平右衛門

永井 藤四郎

鈴木 治兵衛

長谷川七郎右衛門

播磨屋 兵助

金崎 七右衛門

山中 和二郎

岡橋 丈助

池上 新助

中原 卓二郎

石野 充蔵

角田 才二郎

佐藤 要蔵

梁田 八百吉
長野 友太郎

田中純治塾生之初ニ焼香可致処護喪之通ニ而不及之

已上 右焼香白檀七郎兼而懷中之分ニ而相済

右之外諸門人衆勝手次第焼香

此度袴屋仁右衛門格別之義ニ付同志之初焼香相讓候得共承知無之

礼場寺内

留主人

七郎
小一郎
雄右衛門

岡橋 丈助
池上 新助
西島 立敬
田辺屋 為五郎
古林 僕 沓人
福吉 僕 沓人
雇飯焼 沓人

淡輪元潜老自分心得ニ而留主中
老先生接伴被致候事

寺へ遣スもの

米 七升

にしめ

かうのもの

此式品福吉る被贈

右之品朝四ツ時岡橋之僕ニ為持遣し寺ニ而飯を焼す是ハ埋葬ニかゝり候親戚懇意及其家來のミニ用ゆ惣世話田辺屋仁右衛門

袴屋 仁右衛門

千草屋 熊藏

此兩人先へ寺へ行諸寺見繕相頼

茶船沓艘 上大和橋へ繋置キ親戚及童子婦乗ル

帰後夜食可出人数

親類同志別懇之内当夜沓所ニ帰り候人

帳場之人

応接之人 但シ休息所

借り人

雇ヒ人

凡百人

料理献立

汁 とうふ

菜

猪口 酢あへ

すいき

平
へすね
ひりやうす

上貳十人前 松茸
いも
次之分 いんげ豆

但し 平 猪口 井河氏ら八十人前 仕出し
少く不足ニ付内ニ而足ス

酒 百合四升別ニ尼小ニ而七升貰

旧例禁酒ニ御座候へ共此度雇人供人膳中ニ而老
献出ス

翌九日寺へ施物遣ス

使者田辺仁右衛門 僕千八

一金貳百疋

御導師様

一金壹両

墓地料

一銀三匁 四封

御役僧様

一銀貳匁

御小僧様

一銀三匁

御同宿様

一銀貳匁

墓御経料

一銀三匁

挾箱料

一南鐙卷片

御台所 茶料

一銀三匁

実相寺様 御台所

一南鐙卷片

七ノ日忌御布施

一齊米七升

同

一鳥目五百文

盛物料

一鳥目貳百文

御家来へ

一鳥目貳百文

垣外番へ

一銀壹両

御代僧慶恩院様

一鳥目百文

同御供

一鳥目百文

御台所老婆

一六貫八百五十九文

但し八百七十七文 六十五文かへ 砂利十三兩

貳貫八百五十四文 十八文かへ 石灰壹石壹斗

文 穴堀日雇 五升

三百文 右まじ

貳百九十文 桶

但し穿横之節小兒之柩有之ニ付改葬之節入用

貳百三十文 手伝

但し改葬之砌之手伝

右之通り御受納可被下候

八月九日

中井七郎

誓願寺御納所

会葬礼 中井七郎名札

十日町内斗り石野充蔵相勳

一初虞 八日夜 家内ニ而整

一再虞 十日朝 井河ら料理備

一三虞 十二日朝 古林ら料理備

中井髷庵・髷庵夫人・中井蕉園葬儀記録

費用覚

一金壹両三分

一銀三十九匁貳分

一錢壹貫百文

右寺之謝物

一六貫八百五十九文

一

葬埋 寺入用

大工

一四十九匁

但し貳十匁

三匁五分

十六匁五分

壹匁八分

七匁

三分

一三十目九分

但し十五匁九分

十五匁

一貳十壹匁五分

一五貫三百文

但し四匁三分宛

三百文宛

七百文

四百文

一貳匁

大和屋（ヤシ）孫兵衛カ

鳳五郎丸上下

上下仕立代

さらし 壹匁

白帷子壹ツ仕立代

さらし 壹丈

白帶仕立代

袴仁

さらしも綿 三反

白木綿 三反

文四郎

同人

若党五人

雇人拾四人

貳十壹人髪結代

飯焼雇壹人

白檀代

一六百八十匁

一壹貫五十壹文

但し七百三文

壹百文

貳百四十八文

一貳十壹匁五分

但し土座蓋料

一十九匁五分

一五匁三分

一十貳匁八分

一十七文

一四匁五分

一貳百貳十文

但し四十八文

店走

百四十八文 鳥羽走

貳十文 伊丹池田狀實

一三百四十貳文

一五十文

一六十文

一貳百六十文

一八百文

一銀三匁

一百文

一百文

茶船代

草履わらぢ

わらし 四十五足

上あみそり 貳足

そり 貳十足

大和屋長兵衛

釘撞 十四斤

天満屋 甚助

白加賀 五尺三寸

尼小酒

石灰 壹升

七星板下之石灰

好井屋善兵衛

もゝいろ 絹四尺五寸

京伊丹池田狀實

京初之知らせ

同後之知らせ

木具壹膳

寺之筒花

かんばん貳ツ かり賃

並河出入住吉や伊助

取次ニ而挾箱片しかり賃

小遣

会所周助

下役

下役

一 貳百文

当町髪結

一

垣外番

一 南簾卷片

文四郎

一 貳十五匁五分

おさい やとひ

但し病中る

一 三匁

さや やとひ

一 三匁

たこ 同し

一 百文

きさ 同し

一 百文

そよ 同し

一 七匁五分

まさ 同し

但し病中る

一 三匁

平兵衛
おれん様お梯様

一 四匁

寺参り

条 例

一 公辺届向之義

旧例主人死去之節死去のミニ而相濟候へ共此度へ郁次一件京都かゝり之義有之ニ付属續早々親族同志評議之上七郎八田五郎左衛門宅江罷こし内意申合せ之上□□取斗フ

一 訃告

属續後近密之者のミ病氣大切之趣相触れ其他者公辺向相濟候後申遣ス

但し京都伊丹者官命有之候後死去之知せ葬式日限追而兩度ニ知らせ候事

中井髻庵・髻庵夫人・中井蕉園葬儀記録

天満与力衆者岡橋丈助名前ニ而連名回状ヲ以而相知らせ申候事

藏屋敷方各以書状而相知らせ申候事

其他門人懇意等ハ手寄々々申遣シ或ハ以書状相知らせ申候事

一 沐浴

一 穿城

一 澀青

一 穿城

不用旧例手盤ニぬる湯ニ而手拭ニ而ぬぐいおく事

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

一 穿城

古林^る 同老人

帳場前ニ記ス

応接人前ニ記ス

并河^る 出入之者唐人四日^る七日迄

一包金之事

六日升平店ニ而諸包金相願整来^ル

一革島新五郎名代事

太田新之丞出版可有之別ニ不設置処新之丞出版之上禁中

御用ニ付火構候由ニ而急ニ代人相頼候へ共其備なく相濟

候

一^{京都}并河父子代人之事

相頼候へ共臨衷之節故此義なし

一早野之事

死者格別之懇意故行列ニよさし候へ共棺脇ニ引傍ひ被参

候様相頼

一焼香列説出し

田辺屋仁右衛門相頼

〈懷德堂關係研究文献提要(六)〉

⑥論文…時野谷 勝 「懷德堂の歴史観」 (『季刊日

本思想史』第二十号、昭和58年)

本論文は、懷德堂の中興期を代表する中井竹山・履軒の著述を通して懷德堂の歴史観の特色を考察している。

一、中井竹山の『逸史』

寛政四年(一七九二)の船場・天満の大火による懷德堂類焼から寛政八年(一七九六)の懷德堂再興工事竣工までの間、竹山は幕府要路に対して再興の援助を積極的に働きかけている。その二年後の寛政十年(一七九八)に、竹山が既に成稿していた『逸史』を献納せよとの幕府の命が下った。それ以後、寛政十一年五月二十八日に『逸史』を献納するまでの経緯は、竹山の「自序」に明らかであるが、同書中の「進逸史牋」には、「自序」からは看取し得ない『逸史』編述の目的をうかがうことができる。

「自序」によれば、起稿以来五回の推敲を重ね、天明年間(一七八一〜一七八八)ようやく完稿し秘蔵していたところ、図らずも將軍家に聞え、寛政十年十一月に献納の命が下ったため、急ぎ繕写に努め、寛政十一年四月にそれを終え、五月二十八日献納の運びになったという。しかし、「進逸史牋」には、「英主」の「英」の字が、後桃園天皇(在位、明和七年〜安永八年)の諱を避けて「英」と闕筆で記されている。とすれば、『逸史』は、幕府が献納の命を下す以前、明和七年(一七七